

令和八年度 一般選抜入学試験（後期）

小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は表紙を含めないで3ページあります。解答用紙は3枚です。
下書き用紙は1枚あります。
試験中に、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 3 試験開始の合図があったら、まず、すべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入してください。
- 4 解答はすべて解答用紙のそれぞれの解答欄に記入してください。
- 5 試験時間は90分です。
- 6 解答用紙は記入の有無にかかわらず、持ち帰ってはいけません。
- 7 この問題冊子と下書き用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

生産性による切り分け

イギリスの哲学者ジェレミー・ベンサム（一七四八―一八三二）は「最大多数の最大幸福」という功利主義といわれる議論を展開した。この主張は、ジョン・スチュアート・ミル（一八〇六―一八七三）からヘンリー・シジウィック（一八三八―一九〇〇）に受け継がれた。幸福が社会的な善の原理であると主張する前提として、幸福が数量化できるということ、最大多数の人（『マジョリティの社会』）にとって役に立つということが重要になる。功利主義によって「多数」と「最大」という数の基準が価値に導入されたのである。ミルはいう。

幸福が善であること、それぞれの人の幸福はそれぞれの人にとって善であること、それゆえ、社会全般の幸福がすべての人々からなる全体にとって善である（以下略）。

幸福が善でありうることは私も否定しない。しかし「社会全体の幸福がすべての人々からなる全体にとって善」とミルがいうとき、排除されたり抑圧されたりする少数の人への配慮が欠けるのではないか、という点が気になるのだ。「社会全体」という顔を持たないものが主語になっているため、全体を優先したときにはいつのまにか消されてしまう人が生まれるのではないかという点にひかかるのである。

社会福祉学者の藤井渉によると、日本の障害者政策は、第二次世界大戦中の傷痕軍人の支援制度の影響を受けているという。国家に奉仕して戦争で負傷した「役立った人」と、戦争の「役に立たなかった人」という切り分けが初めからあったというのだ。

戦争の役に立つかどうかという切り分けは、戦後になって「経済的に役に立つかどうか」に変化している。日本の主戦場は軍事から経済に移ったのだ。たとえば現在の障害者の支援制度は就労がゴールになっている。障害者がサポートを受ける場も「就労継続支援 A 型、B 型」というように、名称自体に「就労して納税者になる」ことが目的であると明記されているのだ。このように、障害者も労働へと①切り出される。

経済的に役に立つかどうか、それは生産性という言葉に置き換えることができる。個人の生産「性」は、他の人との比較において決まる。自分のために作るのなら「生産性」は問われない。そして、その比較を誰がするのかというと、人ではなく組織や国家である。つまり人間の生産性が問われるときの主体は、あくまで組織・国家なのだ。お互いの顔が見えない巨大な社会では、組織の視点でものごとが決まる。たとえば、テストの点数や年収で他人と自分を比べているときも、自分が誰かと競っているように見えて、実は学校や国家といった顔のない組織によって品定めされているのだ。

セルフケアも国家の都合

こうした組織や国家のパーツになるという問題は、生産性を問われる場面だけでなく日常にも潜む。たとえば、多くの人は体重や血糖値の値を気にし、ウェアラブル端末でさまざまな身体データをチェックしている。健康診断の結果に②イッキイチユウする。これらはすべて自分の身体を数値化する営みだ。

「自分で自分の健康③シヒヨウをチェックしているのだし、健康に気を使っている限りでは、国家は関係ないのではないか」と思う人が多いだろう。ただ個人が健康を管理するようない仕組みをつくることで、国家はそのような意識を利用して医療費を抑制している。

倫理学者の玉手慎太郎は、「高血圧や糖尿病の危険が高まるメタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）の患者や予備軍の人口を二〇二〇年度までに現在の一四〇〇万人程度から二五％減らす」（日本経済新聞二〇一五年一月三〇日朝刊）という政府の方針を報じた新聞を引用しながら次のように述べている。

この記事が伝えている政府の方針は、一見すると人々の健康への配慮からのものと思われるが、実はそうではない。というのもこれは、政府の経済財政④シモン会議がまとめた、財政健全化に向けての改革行程表の原案についての記事だからである。ここから読み取れるのは、国全体の財政の健全化のために人々に健康になってもらわなければならない、という政府の態度であり、そしてここにあるのはまさしく、社会全体の利益のための健康増進という考え方である。

自分では健康のために節制しているつもりでも、実はこれは国家の意志を内面化したものだというのだ。さらには、自ら健康でいることは、労働者として国家の役に立つという点でも、支配する側にとつてとも都合がよいのである。つまり他の人との数値を競い合うのも自分の数値を気にするのも、国家の役に立つという基準があるのだ。

（村上靖彦著『客観性の落とし穴』 ちくまプリマー新書による

ただし、本文の一部の記載を省略している。）

問一 傍線部①④のカタカナを漢字になおし、楷書で正確に書きなさい。判読の困難な文字や不明瞭な文字で解答した場合は採点されません。

問二 二重傍線部 マジヨリテイの対義語をカタカナで書きなさい。

問三 本文を二〇〇字以内で要約しなさい。

問四 点線部 他人との数値を競い合うのも自分の数値を気にするのも、国家の役に立つという基準があるのだ。と筆者が考える理由を二五〇字以内で説明しなさい。

問五 波線部 全体を優先したときにはいつのまにか消されてしまう人が生まれるのではないか という筆者の疑問に関し、実社会で問題となっている事例を一つ例示し、その解決策について、あなたの考えを四〇〇字以内で述べなさい。